田辺元の宗教哲学 ――倫理と宗教の転換媒介――

浦井 聡

本論文は、田辺元（1885-1962 年）の哲学をその中心課題である〈倫理と宗教の転換媒介〉から読み解こうとする試みである。

田辺は西田幾多郎（1870-1945 年）と共に京都学派の礎を築いた哲学者であり、両者の哲学は共に京都学派の両極をなしている。だが、田辺哲学は現在に至るまで西田哲学に比せば全くと言っていいほど研究対象とされてこなかった。特に死後 30 年以上は日本の哲学研究の場ではほとんど忘れ去られ、稀に田辺の弟子筋にあたる研究者が取り上げる程度であった。2000 年頃になって田辺の社会存在論「種の論理」（1934-41 年）が現代的意義を持つ社会論として再発見され、また 3･11 以降は最晩年の「死の哲学」（1953-62 年）が死者をめぐる哲学として脚光を浴び始めたが、これらの研究は田辺哲学の一部の主題だけを取り上げるものが大半である。加えて、田辺哲学が 1944 年を境にして宗教哲学「懺悔道」（1944-53 年）へと移行し、その風貌を大きく変化させたために、解釈に際しては 1944 年前後で区切った上で一時期だけを扱うのが従来の研究の一般的な傾向であった。

こうした状況の中で、田辺哲学全体を俯瞰して統合的に解釈しうる視座を確立することは、田辺研究において喫緊の課題となっている。本論文が取り組むのはそのような課題である。

そこで本論文が田辺哲学の体系的再構築のための切り口とするのが〈倫理と宗教の転換媒介〉である。田辺哲学は主題の多様性や哲学的立場の変化の激しさに反して、初期以来最晩年までを貫く中心的な問題関心がある。それが倫理である。ただし、田辺における倫理はすでに初期の時点から通俗的な意味での倫理ではない。なぜなら、田辺は初期西田から強く影響を受け、西田が『善の研究』で示した宗教的枠組みを踏まえて絶対者との関係を含む倫理を模索していたからである。つまり、田辺の思索における倫理は一貫して絶対者との接触によって可能となるものであった。そして、その接触のたびに倫理は高次の倫理へと繰り返し高められていく。この倫理と絶対者の関係こそ、本論文が〈倫理と宗教の転換媒介〉という言葉で示すものである。このような仕方で徐々に高められていく倫理こそ、田辺が初期から最晩年に至るまで語り続けた事柄である。

そして、〈倫理と宗教の転換媒介〉は「種の論理」以降、絶対者と自己との仲立ちとして〈社会〉を組み込む社会存在論として展開された。そのため、本論文の取り組みには社会存在論の解明が不可欠である。田辺の社会存在論と言えばすぐさま「種の論理」が連想されるが、実際には「懺悔道」では「種の論理」で構築された社会存在論に「懺悔道」の救済論が接ぎ木されることで、言わば〈宗教的社会存在論〉と呼ぶべきものが展開されている。しかし、従来の研究では「懺悔道」における社会存在論の構造は問われてこなかった。したがって、本論文は「種の論理」と「懺悔道」以降の社会存在論の連続性を示すことにより、いまだ解明されていない「種の論理」から「死の哲学」に至る田辺の社会存在論の全体像を提示することをも試みる。

このような見通しの下、本論文は二部から構成される。すなわち、(1)田辺における〈倫理と宗教の転換媒介〉を、自己と絶対者との関係を踏まえて解明する第一部「田辺哲学の基本原理――絶対転換・絶対批判・絶対媒介――」および(2)社会を基点として自己・社会・絶対者の三者の関係を描く〈宗教的社会存在論〉を解明する第二部「宗教的社会存在論の解明」である。以下、各章の議論を要約することで本論文全体の流れをたどっていきたい。

第一部　田辺哲学の基本原理――絶対転換・絶対批判・絶対媒介――

第一章は絶対転換を主題とする。具体的には田辺哲学における個人の救済に関し、絶対無と個人の自由との関係に着目して、初期から「懺悔道」に至るまでの展開を縦走する。特に自由に注目する理由は、自由が個人における〈倫理と宗教の転換媒介〉の証果であると共に初期以来最晩年に至るまで田辺が救済の具体相と捉えるものだからである。

初期田辺の自由論は初期西田の実在論とカントの『実践理性批判』から強い影響を受けて成立する。初期田辺における自由は、『善の研究』由来の〈実在との冥合〉により実現するカントの意味での実践的自由である。

絶対弁証法構築期（1927-33 年）には、自由は弁証法的自由という表現を与えられる。これは初期の自由理解に①シェリング由来の「悪への自由」②禅（西田）由来の「大死一番」③田辺が『判断力批判』に見出した「自覚的合目的性」の三要素を加えたものである。そしてこの時期に、西田から借り受けた実在概念にカントやヘーゲルにおける普遍概念を組み込むことで田辺の絶対無が成立する。

「種の論理」では、弁証法的自由にさらにヘーゲル『法哲学』の議論が組み込まれて〈国

家における自己立法〉が自由として語られるようになる。だが、この見解の徹底がやがて個人の国家への奉仕を説く国家絶対主義を招来し、「種の論理」の展開は中断される。いわゆる「種の論理」の挫折である。

この哲学的挫折の後に新たに構築された宗教哲学「懺悔道」では自力努力による自由の実現は断念され、絶対者による救済の中で自由が与えられると考えられるようになる。ここでは「種の論理」におけるような国家への奉仕は説かれなくなり、他者・絶対者との関係の中でのみ自由が実現すると示される。その自由とは、眼前の社会的現実に対し、無難禅師の「生きながら死人となりてなりはてておもいのままにするわざぞよき」という歌で表現される「おもいのまま」に振る舞うことである。絶対無について言えば、絶対無が高みにあって個人を理性的な方向へ導く原理であったことから、人間の理性の運命に寄り添い導く原理（無即愛）となった点に、「種の論理」以前と「懺悔道」以降の差異がある。

第二章は絶対批判を主題とする。具体的には、「懺悔道」における「哲学ならぬ哲学」がやはり同時に「哲学ならぬ哲学」としてなされなければならなかった理由と、その「哲学」の性質の解明を行う。

まず、「懺悔道」が従前の田辺哲学をあくまで哲学として徹底したものであることを明らかにするために、「種の論理」以前と「懺悔道」以後で通底して扱われていたふたつの主題、①相対と絶対の統一、②事実の学を切り口にして田辺の思索の深化を明らかにする。①に関して、初期から「種の論理」に至る田辺哲学は、相対が絶対に到達する形での両者の統一を目指した。だが、1944 年を境にして、田辺はこの統一が絶対の到来によってのみ成就すると考えるようになる。②に関して、田辺哲学の出発点は西田の『善の研究』の影響の下で〈事実そのもの〉を把捉することを目指す立場であった。これに関して、①と同じく 1944 年を境に絶対の到来によってのみ人間は〈事実そのもの〉に触れることが出来ると田辺は考えるようになる。「懺悔道」が絶対と共なることで可能になる「他力哲学」と表現される所以がこの①②にある。だが、それは上記のふたつの初期以来の哲学的課題へのアプローチの単なる変更ではなく、その最適化である。

上記を確認した上で、「種の論理」と「懺悔道」における決定的な差異を取り上げる。それは両時期における信と知の関係である。先に両時期の信概念の差異を解明する。「種の論理」と「懺悔道」における田辺の信概念は共に理性信仰と表現することが出来るが、両時期で持つ意味が異なる。すなわち、「種の論理」では〈理性に対する信頼〉という意味であっ

たのに対し、「懺悔道」では〈理性が理性を超える絶対者に触れることで生じる信仰〉という意味へと転換されている。信と知の関係については、「種の論理」では信は知の領域に吸収されているのに対し、「懺悔道」では信と知はそれぞれ独自の領域を持ち、互いに高め合うような関係にあるため、こちらも大きな変化を遂げている。

第三章は絶対媒介を主題とする。具体的には宗教で一般的に教化や伝道と表現される事柄を扱う。もちろん、教化・伝道と言っても一般的な宗教の枠を越え出るようなものとして扱われている。それは一言で言えば、〈絶対無による救済の波及〉であり、特定の宗教の教えの伝播ではない。田辺の絶対無はその規定により、歴史的世界の事物に対して直接にはたらきかけることはできない。したがって、既存の事物を媒介者とすることによりそのはたらきを歴史的世界に伝達させる。これが田辺哲学において教化にあたる事象である。田辺は教化の媒介者をすでに絶対無に救済された者（空有）に見出す。だが、本章では、田辺自身の救済の告白を考慮に入れるならば、そのはたらきかけの媒介が田辺の所論を超えて、歴史的世界のあらゆる存在者・事物でなければならないことを主張する。そして、このような理解によってこそ、田辺が自身の立場を示すに最も相応しいとした万有内在神論(panentheism)の意義が十分に引き出されることを明らかにする。

第二部　宗教的社会存在論の解明

第四章では、宗教的社会存在論の論理的構造の解明に先立ち、『正法眼蔵の哲学私観』から「死の哲学」に至る展開に現れている宗教的社会存在論の表層的遷移を概観する。その際、宗教的社会存在論の解明という本論文の目的に従い、以下の二点を主な焦点とする。ひとつは第三章で明らかにした人から人への救済の伝播の具体的展開、もうひとつは田辺が「類」としたものの展開である。このふたつを選ぶのは、後者がそれぞれの段階の社会存在論が目指す理念であり、これを実現する手段が前者だからである。本章での通史的概観を踏まえ、第五章から第七章における宗教的社会存在論の解明に進む。

第五章では、〈種－類〉の関係に着目して「種の論理」と「懺悔道」の社会存在論の連続性と差異を示す。まず、「種の論理」における〈類－種－個〉の論理的構造を示し、これが「懺悔道」以降も用いられていることを確認した上で、両時期における種の位置づけの差異

を示す。種は『実存と愛と実践』で実存協同の概念が登場した後、「種の論理」で示された人類的国家の基体ではなくなり、実存協同の基体として再規定される。本論文はこの位置づけの変更に、田辺哲学からの国家的契機の消滅ではなく種の性質の変化を見出す。その変化とは、類が実存協同として、つまり国家のような実定的範囲を持つものとは異なる〈人々の集まり〉として成立する時、その基体となる種も〈人々の集まり〉へと変わることである。このような〈人々の集まり〉を、本論文では「協同態」と表現し、実存協同は種的協同態が類化されたものであることを示す。

上記の解釈が可能になる根拠として、本論文は種の形相（種の伝統・慣習）を意味する「種相」の概念に着目する。種相は、『実存と愛と実践』で、最高種から最低種に至るまで無限に分裂するとされている。この見解を「種の論理」から語られる「種の無限可分性」という構造と併せて考えることにより、実存協同に転換される種的協同態は、その種相ごとに無限に分裂することを示す。さらに、個人は、種相ごとに分裂していく複数の種的協同態に多元的に属すること示す。そして、個人が複数の種相の下で、実践理性の二律背反に陥る時、無即愛に絶対転換されて死復活を遂げ、その後に自身が属する種的協同態において利他行為を為す時、その個を中心とした実存協同が成立していくことを明らかにする。国家・社会の側面から本章の到達点を言いかえるならば、以下のようになる。すなわち、実存協同は、歴史的世界における国家・社会の内部に存在する大小さまざまな種的協同態に、個を媒介として無即愛のはたらきが浸透することによって成立する。したがって、実存協同は国家・社会と無関係なのでなく、宗教共同体までを含めたすべての歴史的世界における種的協同態から成立する。

第六章は、〈種－個〉の関係に焦点を当てる。具体的には、「種の論理」と「懺悔道」の両方に跨って存在する契機である「真の個」に注目して、田辺の宗教哲学における救済の社会存在論的構造を明らかにする。これにより、「懺悔道」での救済の「種の論理」との社会存在論における連続性が明らかになる。すなわち、「懺悔道」で死復活の契機として中心的に説かれる実践理性の二律背反は、「種の論理」における真の個の生成の契機として説かれた種の自己否定（分裂・対立）に起因するものである。本論文では両契機が「種の論理」と「懺悔道」の両方に存在することを指摘することにより、田辺が『種の論理の弁証法』で「懺悔道」を「種の論理」の発展型と宣言した意図を明確にする。

次に、真の個の性質が①種由来の形相及び②質料、③無即愛が浸透した種の形相――本論

文はこれを愛の形相と名付ける――の三契機によって規定されることを明らかにする。その上で「種の論理」以降の田辺の社会存在論において種を類化させる契機である〈真の個の行為〉を、この概念の生成を踏まえて解明する。1930 年頃に田辺が絶対弁証法を確立して以来、個の行為は相対即絶対の統一を実現させる契機として考えられている。この時期には行為は「道徳的行為」と呼ばれていた。しかし、「道徳的」の内容が具体的に規定されたのは「種の論理」に至ってである。「種の論理」では戦時下の時局の進行と相まって、道徳的であることは国家への奉仕と同義とされ、国家の絶対化に陥った。「懺悔道」はこの思想的挫折の中から現れた立場であり、そこでは国家への奉仕は個の行為の要件とされなくなる。この立場は歴史的世界の背後に自己を救済する無即愛のはたらきを認め、社会に存在するものすべてを無即愛による救済の方便と見なすものである。そのため、あらゆる出来事を自己を救済に差し向ける方便として受け止めて、これに自由に応じることが「懺悔道」以降における真の個の行為の理念であることを示す。

第七章では、〈個－類〉の関係に着目する。具体的には、田辺の社会存在論全体の理念である〈人類の協同〉に向かう道筋を、実存協同成立後の両者の関係から明らかにする。そのために本章が扱うのは、連帯懺悔に基づく個の実践による類の拡大である。

田辺における救済は「自己犠牲即復活」という言葉に象徴されるように、他者に向けて自己自身を犠牲にする中で実現するところに大きな特徴がある。だが、「死の哲学」で登場する菩薩行が象徴的であるように、往相と還相が切り結ぶ点として「自己犠牲」を強調する田辺の宗教的社会存在論は非常に極端であり、1939 年以降の「種の論理」における国家絶対主義の変形と取られても不思議ではない。本章では田辺における〈公案〉と〈媒介〉の概念を再検討することによって、田辺の宗教哲学で説かれる自己犠牲的利他行為があくまで連帯懺悔における空有の往相的課題として立ち現われてくる理路を示す。そのことによって、空有の往相的理念として人類全体の協同態を示したのが田辺の宗教的社会存在論であったことが示される。